

第7期 フューチャーフラワー基金 報告

出張者：日本・ネパール文化交流倶楽部代表 サンジブ・アリアル

日程：2013年3月16日～4月2日

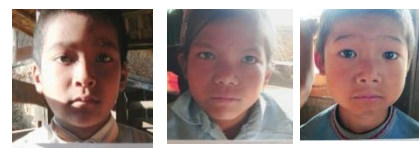
3月17日～25日	カトマンドウ滞在。現地スタッフと日程の調整・ミーティング等
3月25日	マイディ村へ出発。ササ村（いつも交流ピクニックを開催する、ダディン郡の入口の村）から徒歩で6時間。
3月26日	子供達との面接開始。その後、村の学校などを見学。
3月27日	マイディ村出発。帰路はバスで。
28日～4月1日	資料整理、現地スタッフへの今後の指示、支援金の分配等の作業

同行者：佐々守三さん（フューチャーフラワー基金支援者第1号-2009年4月より）

※佐々さんの報告は別紙及びニュースレター【歩み】vol.3を参照してください。

第7期の概要

募集の結果、新規11名の方から支援のお申し込みを頂きました。大分県(4名)をはじめ、愛媛県(1)、神奈川県(1)、東京都(1)、福島県(1)、岩手県(1)、そして宮城県(2)と、これまでと同様に既存会員様のご紹介により支援スタートされた方が目立ちます。新しく選ばれた子供は12名で、今回更新いただいた支援者様の分と合わせますと、当基金の支援を受けて学校に通えている子供は計99名に達しました。日本の皆様のご協力にこれまで以上、心より感謝申し上げます!!



フューチャーフラワー基金 学費支援の仕組み

- ✚ 私たち日本・ネパール文化交流倶楽部は、与えられる者が必要としている者へ、“学費を支援する”という形で、「気持ち」の交流のお手伝いをする橋渡し役を4年間続けています。
- ✚ 対象となる子供は、国連や大規模なNGOの支援の目には留まらない程小さく、社会の底辺に取り残されている、また、幼いうちに底辺へと陥ってしまった子供たちです。
- ✚ 支援は日本で年に2回募集し、その都度仙台事務局のスタッフがネパール農村部へ年2度訪れます。集まった支援の人数に応じて、本当に必要な子供を毎回直接面接し選びます。
- ✚ 村には銀行もATMももちろん無い為、子供一人ひとりへ支援金の手渡し（村の移動手段は徒歩）、面接前の事前調査、通学しているかの確認等、村全域の多岐にわたり時間のかかる作業を現地スタッフに頼っています。この支援は、多くの村人の協力と、こういったスタッフの継続的で地道な仕事の上に成り立っています。
- ✚ 今回は周りの村の女性たちのフューチャーフラワー基金への理解がより深まったと感じました。村に到着した次の日から、我々が対象としている「底辺の人たち」が次々とやって来ました。“正しい情報の収集と伝達”は村ではとても容易ではありませんが、カルパナさんを中心とした村のコミュニティーの協力のおかげで、大変スムーズに今回分の子供を選ぶことが出来ました。
- ✚ ネパールの山岳地帯の農村部の人々はほとんど「裕福」とは程遠く、出来ることなら支援を受けたいほどの状況です。それにも関わらず、無欲に自分たちより困っている家庭や子供たちの為に何かの助けを探して、情報提供して下さいます。日本の支援も同様、「余裕があるから」や「お金持ちだから」と言った理由ではなく、「顔の見える誰かの役に立ちたい」という気持ちだけで支援をして下さる方が多いと感じます。

今回選ばれた12人の子供たち



- ① 両親ともに健在で、一緒に暮らしている子供：0人。
6人は母子家庭。祖父母、又は親戚のお世話になっている子供が6人。
- ② 5歳～10歳まで、男児5人、女児7人。
- ③ 支援の緊急性が高い家庭が目立つ。暗闇の中の一筋の光になればと、支援を決定するのには難しくなかった子供ばかり。

子供たちの置かれている状況



ネパール農村部の生活は自給自足の農業が主体です。昔は教育がなくとも、代々受け継ぐカースト制に基づく仕事があった為、それぞれの生活が成り立っていました。しかし、そのシステムはだいぶ前から崩れ始め、現金収入が無いと楽に生きてゆけない時代となりました。また、教育の義務化が進んでいないのも農村部で、教科書、制服、文具などにも現金が必要です。教育が無く仕事も無い親の子供が教育を受けられず大人になることで、ますます悪循環の連鎖が広まっています。

教育を受けなかったが為に、そういった親は子供の結婚相手を決め、大人になる前（女子は15歳頃、男子は20歳～30歳）に結婚させるのが一般的です。教育を受けられなかった為、分別の無い子供は、親の言いなりに知らない相手と突然結婚させられるのです。

今の日本の様な研究し改良された農業と違い、たとえ畑を持っていても土地が痩せていたり、気候によってダメージを受け易かったり、時期によっては収穫が極端に足りないということもよくあります。肥料も家畜の排泄物から作り（家畜を所有していない人は他所の家から労働の代りに譲ってもらう）、農地は平坦ではないため作業もすべて人の手で行われています。その日一家全員が食べていくのがやっとの状況の中、農業だけではもちろん子供の通学に必要な靴、制服、文房具等を買うわずかな現金は手に入れられません。

父親は現金収入と家族を養うため、チャンスがあれば首都のカトマンドゥや外国（主に中東やインド）に出稼ぎに出ます。しかし読み書きができないので、大半は過酷で不安定な労働力に従事します。相互扶助が基盤の村文化とのギャップや差別、孤独、不規則な労働からの相当のストレスにより、場合によっては逃亡や事故でそのまま帰らぬ人となるケースが、支援対象となっている子供たちの親にも見られます。

そしてまた村に残された母親は、いつ夫が戻ってこられるか分からない不安の中、家と畑、子供と家畜の世話、嫁としての務めを一気に背負わざるを得ません。父親の精神的・身体的障害、死亡などが原因で現金収入が全く無い家庭の子供たちは、通学どころではない状況なのです。

様々な理由で両親が共にいない子供達は、同じように余裕が無い環境の中でも面倒をみってくれる大人がいます。そういった子供の現実を身近で知り、支援に結び付けてくれる村人がいるからこそ、本当に必要な子供達へと支援が届けられるのです。

ここで、今回選ばれた子供たちの中からいくつかの事例を紹介いたします。

- 両親も兄弟もいない。母親は結婚せずに出産し、1年後、生活苦と無知の為に、家出してしまい、現在はおじいさんとの2人暮らし。おじいさんも教育を受けていない為、教育の大切さを理解していない。
- 祖父、祖母、父、叔父は一度に同じ交通事故で他界。母と叔母とその子供たちと一緒に住んでいる。突然の悲劇のダメージがあまりにも酷く、母親はあまり質問に答えられる状況ではなかった。
- 最近サウジアラビアに出稼ぎ中だった若い父親が工作中、事故で亡くなった。それが原因か、最近母親も21歳の若さで他界。おそらく自殺とみられる。通学はおろか、これからどうやって生活していくのかも

不安な状況。幸い、叔母が面倒を見ているということで、学費支援が少しでも彼女（たち）の未来を明るくできればと思い、支援を決定。

- 母親は若すぎる年齢で親が決めた人と無理に結婚させられたせいか、彼女が2歳の頃に別の男性と逃亡。後に、父親も別な女性と逃げてしまった。
- 3年前に母親は病死、父親も精神の病を患っており家出したまま帰ってこない。残された姉弟を、母親の妹（未婚）と一緒に住んで面倒を見てあげているが、食べさせるのがやつの生活。姉はどのくらい通学していたかは不明で、現在家事手伝い。弟に先に教育を受けさせてあげたいとのことで、出来れば彼女も教育を受ける予定。
- カースト制で元不可触民。代々鍛冶屋の民族で、仕事があった昔は教育を受けずとも生活ができたが、今は現金収入になる仕事無く、自給自足する土地も少ない。カースト制が違法になったとは言え、差別や偏見が未だ村の上の世代には残る。次の世代に、無教育⇒無知⇒モラルの低さ⇒生活難という「負のサイクル」を繰り返させないためにも、教育支援が必要。



まとめ

今回の報告では、私たちが支援する子供たちとその家族が抱える、無教育ということで広まる「悪循環」について、説明させていただきました。

知れば知るほど辛くなるかと思いますが、一つ確かなことは、皆様の支援で学校に通う子供たちの状況が確実に明るくなることです。だからこそ「可哀そう」とは思わず、是非皆様に支援の重要性をご理解頂き、一人でも多くの子供の笑顔が増えることを願い、報告をさせていただきました。

最後に、ネパールが抱える文化的な事情について触れ、締めくくりたいと思います。

「不可触民（アンタッチャブル）などの低カーストの間人はモラルが低いので支援する必要がない」、という古い考えが上位カーストの年長者には、まだ当たり前の価値観として残っています。元上位カースト出身のサンジブ代表だけでなく、日本人の鈴木が面接に村を訪れる際も、そういった村人から反対を受けることがしばしばあります。また支援の本当の目的（底辺の底上げ）を理解せず、嫉妬心で反発する村人もいます。そういう現状に出会った時は、がっかりするのではなく、むしろもっと頑張らなければと思うことにしています。

この度も実感として明らかになったことですが、支援活動を地道に継続することで理解者が少しずつ増え、きっとそういった古い価値観や誤解が減り、差別や偏見に打ち勝つ力を持つ大人が増えると信じているからです。また教育を受けることにより、カーストや生まれにこだわらない広い価値観と知恵を後世に残せる大人が育つことを切に願います。

苦境にもめげず、声も上げられない人たちに支援を届け続け、ネパールに子供たちの笑顔が増えることを願いつつ、今後も続く限り活動を続けてまいります。

これからも皆様のご指導、ご協力、宜しくお願い申し上げます。

日本・ネパール文化交流倶楽部

平成 25 年 5 月 16 日

<今回の経費>

- 旅費（仙台⇄カトマンズ）：¥167,500
 - 食費・宿泊費（2週間）：¥28,000
 - 現地交通費：¥1,500
 - 現地スタッフ手当（6か月分）：¥18,000
- 計 ¥215,000

<今回文房具代をカンパいただいた金額>

2名の会員様より合計¥12,000 のカンパを頂きました。どうもありがとうございました。